日本G.A.P.ニューズレター

No. 6-7

日本G.A.P. ニューズレター 第6・7号

目　　次

バビロンの時代 ―――― G. アダムスキ 1
質疑応答 ―――― C. A. ハニー 3
《宇宙哲学》 ―――― G. アダムスキ 7
宇宙哲学の定義 ―――― 7
真理とは何か ―――― 7
弛　　緩 ―――― 9
宇宙の言語 ―――― 11
化学的な宇宙 ―――― 13
古代の知恵か現代の進歩か ―――― 14
過去の文明 ―――― 17
練 習 法 ―――― 20
〝宇宙哲学〟の読み方 ―――― C. A. ハニー 20

バビロンの時代

ジョージ・アダムスキ

かつて私のところにいた助手が現在いませんので、手紙類が山積しています。それで私はこのニューズ・レター（註。ハニー氏のニューズ・レターを通じて多くの質問に答えることにします。

私はサイレンス・グループを恐れてはいないということをはっきり申しておきましょう。恐れているとすれば、こんな記事を書きはしません。私はブラザーズが未だ本来の目的のために活動していますので、私がサイレンス・グループの主な目標になっていることを知っています。私は右の目的を宗教、考古学、その他ブラザーズの真目的について大衆を混乱させるような分野と混ぜることはしないつもりです。

この真目的を他の諸目的と混ぜる人は、混乱を望んでいるサイレンス・グループに自身を貸しているのです。遺憾ながら私の最も親しい友人達のなかには故意にかまたは知らないでこんなふうに自身が利用されている人がいます。その結果、私たちの活動は少なくとも一年間阻まれてきました。

私はサイレンス・グループの行動についてこれまでに何も言いませんでした。それはワナにかかっている私の友人たちの誰かを傷つけることになるからです。しかしすでに完成した善良な人々を救うために、このことはいつか必要になるかもしれません。実際にはサイレンス・グループのために役立っているのに、自分が正義のために働いているのだと信じ込まされている人々もあります。サイレンス・グループはこの種の欺瞞と宣伝の達人です。私は世界旅行でこうした人々に個人的に接したので、知っているのです。彼らは同好の研究家たちの間に背信や混乱を起こそうとしています。彼らは団結にこそ力が存在することを知っていますので、国家間と同様に同胞の間でも分裂を起こそうとするわけです。政府でさえもこの型の悪徳におちいりやすいのです。サイレンス・グループは致命傷を与えんものと常に打ってかかるでしょうが、私は地上で生きるのにただ一つの命しかないことを別段恐れはしません。

グレン中佐の人間衛星について、多くの人がグレンの見た物（複数）について質問しています。これらの〝物〟がカプセルの側面に衝突するのを防いだのは一体何でしょう。あのカプセルは疑似真空の中を飛んでいました。というのはあのスピードで空間を飛ぶ物はその周囲にそれ自体の空気層を生み出すのです。これはいわゆる空気のない空間でさえも起こります。するとカプセルの本体とその周囲の気層の間に真空状態が自動的に生み出されます。これが一種の保護層または〝フォース・フィールド〟として作用し、飛んで来る小物体がカプセルに衝突するのを防ぐわけです。

グレンが目撃したより大きな物体（註。複数。蛍の光のようであったといわれるもの）は、或る宇宙母船から発射された調査用小型円盤群で、遠隔操作によって飛ばされていました。この円盤群はグレンの飛行ぶりの詳細を監視していたのです。もし工合のわるい事が起こってグレンの生命が危機に瀕するようになったとすれば、ブラザーたちは彼を救ったことでしょう。グレンはあまりに遠く飛び、そして忙しかったために周囲で発生している事柄を多く観察することはできませんでした。たとえ彼が円盤だということを知ったとしてもそれについて口外することは許されないでしょう。彼が未だに軍務に服していて、軍の秘密厳締下にあることを忘れてはいけません。

私はここで一つの事柄を確認しましょう。すなわち、地球の大気圏外のある地点には絶対に数分間の宇宙船がいて、地球人が企てることを注視しているという事実です。もし不幸の事故が起こったとしても地球人を救出することは必ずしもすぐ可能ではないでしょう。彼らのブラザーズはわれわれの〝現実〟からかなり遠方に留まる必要があります。というわけは、彼らの大宇宙船は地球のコンタクト機や操縦装置などに逆に影響を及ぼすことになるかもしれないからです。彼らの宇宙船と地球のコンタクト機とはあたかも象とハエをくらべるようなものです。グレンだけただ一人が又気圏外にいたのではありません。グレンのあとに続く人も同様です。たとえ、パイロットが親しく会話できるほどの距離に又母船群が控えさせられていたとしても、パイロットは調査用小型母船を見る筈です。

最近の話題の異常な事故に関係があったのではないかと多くの人が質問しています。そうです、たしかに関係がありました。そして実に多くの関係が生じてしまった。これらの気候の変化は自然の周期の一部になり、地球上のあらゆる物を揺さぶりつつあります。この時期の宇宙人達は不安になり、他の人々に刺激しなければ自身を傷つけることになるかもしれません。これが近の人年間に多くの不愉快な物事が起きでしょう。それは地元人間をそれに影響を受けないようにして、素晴らしい調和を持つ世界があります。

われわれは現在、〝バビロン〟の時代に生きていると言えます。そこでは人間の自我がとれ自体を善として崇拝するだけです。（註。バビロンは紀元前二、二〇〇年頃にアジア南西部に栄えた繁栄の都として有名）しかし〝宇宙の英知〟は永遠に働き続けるでしょう。イエスが言ったように、実を結ばない木は火の中に投げ入れて燃やされるべしです。そうです。今は人間の魂がその頑強さを試されている時代です。〝宇宙の英知〟かそれとも人間の自我のいずれかにたいする貞節です。遺憾ながら右の時代が過ぎ去るまでには殆どの人は火に燃やされるでしょう。

人間の心は実にいい加減なもので、多くの物事にたいする豊富な知識に欠けていますので、多くの面でだまされやすいのです。ときとして人間の心は〝至上なる英知〟を否定する傾向を持ち、心自体の発作的狂暴性を起こします。それは自己抹殺に至るほどに〝宇宙の英知〟に挑戦することになるでしょう。もし人間の心が試されつつあるということになれば、今こそその時です。

私がそこ迄されている〝旅〟から帰れば以上のことについて、また未来が人類に何を約束しているかなどについてもっと詳細を知るようになると思います。私は一つの事を確言できます。すなわち、私は自分の快楽のために〝宇宙計画〟を、ブラザーズを決して裏切ることはしないということです。永遠という長さのなかでは地上の生活は一瞬間にすぎません。

はるかなる未来の日に　人類は立ちどまって
はるかなる過去をふり返って見つめ、たどりまた道を調べて、
むかしのコロンブスのようにただ独りで立っていた天を見出すだろう。
人類の運命が展開するにつれて、上空の星々を指さしながら、
嘲笑をものともせずに、支持する人が殆どないままに、ただ
独りで立っていた人――

（註。これはフダムスキの七十一才の誕生日を記念してハニー氏がフダムスキに捧げた詩の一部分の大意です。編者）

質疑応答

（註。これはコズミック・サイエンス・ニューズレターに掲載された〝疑問と回答〟の訳で、回答はハニー氏によります）

〔問一〕〝同来記〟に私は非常な興味を持ちましたが、しかし科学的な事実だけを扱う或る研究団体の長として、私はあなたの側のコンタクトについての何かの証拠を示していただければ幸いと存じます。（ユタ州の一科学研究会会長 J・S）

〔答〕 右の質問はハガキで寄越されました。この人はおそらく何かのクラブを始めたばかりのティーン・エイジャーだと思います。私は次のような回答を送りましたが、これは証拠物件について同じような質問を寄越された人々にとって興味あるものでしょう。

「私たちがあなたの要求される証拠を提示する前に、私たちは次の二つの事を知る必要があります。㊀アダムスキのコンタクトについての十分な証拠物件としてあなたは何がよいと思いますか。㊁あなたが科学的な事実だけを扱うからというからには、あなたの言われる〝科学的事実〟という言葉の意味を説明して下さいませんか。今日の〝科学的事実〟は明日はすたれた理論になるということがこれまでの私の体験でした」

言うまでもなく返事は来ませんでした。この人は一体どんな種類の証拠物件を求めているのだろうと私はいつも奇妙に思っています。これまでに示された豊富な証拠の何たるかを見抜くことができないとすれば、それ以上に何が欲しいというのでしょう。

アダムスキ氏は、過去十年間に専門家連による精査に堪えてきた写真類を提示しています。また彼は、金属のドームであることがハッキリとわかる宇宙機のカラー映画も撮っていますし、最初の砂漠の会見について宣誓書に署名した証人たちもいます。またロケットや人工衛星類が発見した無数の新事実は、科学者がそれを発見するだいぶ以前にアダムスキ氏の著書類に述べてあります。これ以上に何の証拠物件を必要とするでしょう。眼前にある事実が見えないほどにわれわれは愚かしいということになるのでしょうか。

〔問二〕 私たちが教会で聴く話は私たちを満足させるものではなく、信仰ということになれば全く制限されているように思われるのはなぜでしょうか。牧師たちは円盤問題を嘲笑し茶化したりします。何度も私は家に帰るほうがよいと思いましたが、しかし精神的に生長するのに何かの助けになるかもしれないと思いながら教会へ通い続けています。（オハイオ州、W・P・ウォーレン夫人）

〔答〕〝円盤の識別〟中の〝聖書とUFO〟の章の一〇四頁をお読み下さい。家族問題は取扱いにくい問題で、私が次のように言うのは別に特定な家族や団体をも攻撃するわけではありません。

私の意見では、教会が満足させないのはその教えの九〇パーセントが人間の教義であって神（宇宙の法則）の教義でないからです。殆どの教会がガイドとして聖書を用いよと言っています。しかし実際にはどれだけの人が聖書に従っているでしょう。いるとしてもほんの僅かです。大抵の人が自分の特殊な信念に合致する部分だけを取り上げて、あとを無視しています。もし教会が聖書を霊感によって書かれたものと認めるならば、教会は聖書からの訂正を受け入れるべきです。たとえば聖書は言っています。「他人からしてもらいと思うことを他人にもせよ」と。どれだけの人がこれを行なっているでしょうか。

なぜ教会は満足させてくれないのでしょう。教会は言います。「あな

たが正しく生涯を終えれば（教義的な正しさの観念に基づいて）死ぬときに天国へ行くとする」しかし、聖書にはこんなことは書いてありません。ユダヤの神秘の教義かれを超えたとする教会もありますが、こんな教義は聖書の中に述べられてはありません。人々は聖書の通った事と事実とを望んでいます。それでも論理的に示されるとすれば、それは少なくとも論理的であるべきです。

真実の聖書研究家たち諸兄たちは円盤問題を黙殺しません。円盤は聖書の中に預言を述べてあるからです。また円盤は時代の終りに関する予言の証拠となっています。そしてその予言は実現するでしょう。

人間とその創造者についての理解力を人間にもたらす責任を教会がとってきているからには、ブラザーズ事件の事実とされたまつわる真相とを声明するのは教会の義務であるように思われます。そうすれば一般人の側における敬意に満ちた態度のかわりに軽蔑を得ることになります。

もし教会がこの事実を世間に声明しないならば、地上で人類に何が起こってもそれにたいして教会は責任と罪を負わねばならぬことになります。われわれは最後の段階に立っています。二つの事の内で一つが起こるかもしれません。ブラザーズの援助によってわれわれは高度に進化するようになる時で、この世界にかつてなかったほどの文明を永続させ得るのです。世界の人々が一体化するために永続するか、それとも核戦争で互を完全に絶滅させることもできます。

かくて、ブラザーズの家庭に関する"真相"の声明の必要性は一般人が気づいているよりもはるかに重大です。世界の人々が実際に危くなっている事柄を理解するためには、受容的な人々と広くこの問題が知られることが必要です。

聖書に書かれている予言はどうにかして実現するでしょう。この地上に天国が確立されるか、それとも地球人類の完全な絶滅が起こるか、そのいずれかが避け得られない結果となるでしょう。その選択は人間自身にあります。しかし――主な責任は世界中の精神的指導者の肩にかかっています。

〔問三〕 以前の聖愛宛答であなたは次のように言っておられます。「生命の期間が長いにもかかわらず、彼ら（宇宙人）はわれわれと同様に死と生まれかわりを体験する」 地球人は一体どんな生まれかわりを体験することになっているのですか。（ガイ・J・シル）

〔答〕 われわれは自分が人格の長で発達している程度にしたがってこの地球かまたは高い進化をとげた惑星に肉体を持って生まれかわります。聖書にはこのことを復活、すなわち生まれかわりと述べてありますが、元の意味とは遠かに曲げられています。

〔問四〕 或る女流円盤研究家に最近アダムスキのこと、聞いてみましたところ彼女は次のように答えました。「おお、彼はアルコール中毒の患者です。私は彼のことは全然話すにいうもデスモンド・レズリーのことだけを話しまして」。私はショックを受けました。これは一体どうしたわけでしょう。（ワシントン州スポウケ。ソ・エ・ル夫人）

〔答〕 アダムスキ氏はアルコールは毒薬までではありません。これまでにかかったこともありません。しかしイエスでさえも、ときとしてブドー酒を飲みましたし、すべての事に適度であれとだけ言っています。これは飲酒と同様に食事にもあてはまります。アダムスキ氏はコンタクト・グループの男女漢を指導しますので攻撃されています。しかし彼は真実の心霊研究者にたいして決して対抗はしません。詐欺師だけが彼を恐れるべき理由を持っているのです。

もっと有名な円盤研究家や講演家の中には故意にかまたは知らずにサ

イレンス・グループを援助しているのがいます。一方では宇宙機に関する真相を明るみに出そうと努力しているように見えながら、アダムスキ氏を失墜せしめようとして実は真実に反して活動しているのです。この人々はまじめな人たちなのだと信じながら多くの新来者はたやすく騙されています。これは私の意見ですが、私の考えではコンタクトマンの中にはサイレンス・グループによって欺かれている者がいるようです。こうしてサイレンス・グループは、コンタクトマンが騙されているとは知らないでその体験を語るように仕向けて、この円盤問題を教養の高い人々がまじめに取り上げることを妨げるように作られた馬鹿らしい物語を拡めているわけです。

〔問五〕　マイアミにいる一友人が次のように語ったことがあります。「アダムスキは駄目だ。いつか奴は車を運転していて溝の中にはまり込んだ。それで車を捨てて歩き始めた。奴は次のように言った。『人間にたいする供給は無限だ。ブラザーズが私に新しい車を見つけてくれるだろう』」これはほんとうですか。（フロリダ州マイアミ、J・F・K）

〔答　〕　人間というものは自分の手に負えない事や理解できない物事を疑ったり嘲笑しようとしてとやかく言いたがるものです。アダムスキ氏はこれまでに自分で車を運転したことはありませんし、運転免許証を取得したこともありません。説明しなくてもおわかりでしょうが、右のような話は完全な作り話です。われわれの計画に反対する人々は何らの調査もしないでこんな話に飛びついてそれを事実として流しています。右の話は奇妙にもわれわれの計画に対抗している円盤研究誌類に載っているまぎれもない虚偽の話です。アダムスキ氏をやっつけようということになれば確証や調査などしないで載せられるのです。

〔問六〕　霊魂にとって終滅ということがあるのですか。（ヴァージニア州ロウアノウク、G・C）

〔答　〕　人間は二つの魂を持っています。一つは感官の心（センスマインド）であって、これは破壊され得るもので、肉体の死とともに滅びます。他の一つは肉体の内奥にある〝英知〟で、これは不滅であり、肉体は死んでも存続します。この魂は人間の心が考え得る限り始めも終わりもありません。

〔問七〕　われわれはどうすれば精神統一がやれますか。（右に同じ）

〔答　〕　あなたが進化することを望み、テレパシーに熟達したければ、決して精神統一をやってはいけません。これはあなたが求めているものを破壊するからです。熱心な精神統一はこの世で何かを達成するのに唯一の方法だとわれわれは教えられてきましたが、実際には真人としての向上とテレパシックな印象の感受は精神統一にかかっているのではなく、関心と弛緩とにかかっているのです。

いわゆる精神統一は肉体が固定している状態で、一定の時にただ一つの想念だけを明白ならしめるのですが、関心は好奇心の状態で、それは周囲のあらゆる想念にたいして真実の意識を開かしめることになります。そしてこれは或る程度自由な状態でその想念群との非個人的な関係を生じさせます。

適当な関心の状態を保つためには弛緩というものを知る必要があります。これは一般で考えられているような不活動の状態ではなく、激しい活動の状態です。それは自由な活動であるからです。一方、精神統一をやっている間は疲労と緊張が急に起こってきます。正しい弛緩の状態の間は、肉体は甚だしく〝生々として〟感じ、想念群は急速に心を通過します。かかる場合には実際には数分間が過ぎただけなのに数時間が過ぎたように感じられます。

非個人的な弛緩の状態にあれば人体はすべての振動にたいして感受的

になります。しかしその場合は一つの想念だけに関する精神統一をやめて自由にならなければなりません。そして自我と感官の心は抑制されている必要があります。するとテレパシーすなわち方物から来る印象の感受は可能になるのです。

〔問八〕　貴下のがらくたニューズレターを有難う。それを同封して送り返すから、こんな狂気じみた話を信じやすい誰か他のおめでたい人にまわしてくれ給え。われわれは、インチキをでっち上げたり奇遊星を訪問したと称する者から何も聞きたくはない。だから貴下のがらくた誌を決して送らないように頼む。コンタクトマンたちよ。〝真相〟とイカサマ師に気をつけられたし。追伸。ジョージ・アダムスキについてはジム・モスレイからNICAP（註。空中現象調査会。アダムスキ攻撃の一方の旗頭）宛にインチキであることが暴露されている。――正直なUFO研究会より――（ニュージャージー州ケンドール、ニュージャージー空中現象研究会々長、エド・バブコック）

〔答一〕　アダムスキ氏と私はこの手紙を見て大笑いしました。この人はわれわれの資料を読んだことさえない人のようです。アダムスキ氏は如何なる遊星をも訪問したとは公表していません。私がこの手紙に回答したとき、私はバブコック氏に、人工衛星類がこれまでに宇宙空間で発見した事柄についてアダムスキ氏がかつて述べていたという事実をあなたはどのように説明するかと尋ねて、最初の人工衛星が打ち上げられた時よりもだいぶ前にアダムスキ氏が発見した事柄の詳細を述べておきました。すると彼は「人工衛星類が打ち上げられることは誰も知っている。広く喧伝されているからだ」と答えて来ました。この回答で彼が正直でもなければアダムスキ氏の著書ばかりでなく私の手紙をも読もうとしないことがわかります。これが彼の〝正直な〟研究の一例であるとすれば、彼に情報を頼っている人々を私は憐れむだけです。UFO研究団体の長として彼は円盤研究界で一体何が行なわれているか、またこれまでに行なわれて来たかについて驚くべき無知を示しています。

モスレイとNICAPの両者はこれまでアダムスキ氏についていわゆる暴露記事を流してきました。しかしいずれの場合も、この両者によって流された記事内容と真相とは似ても似つかぬものでした。NICAPの情報というのは実は或る霊的な自称コンタクトマンから提供されるもので、この男はかつてアダムスキ氏が彼の虚偽性を涼らしたために、ひどくアダムスキ氏を憎む理由を持っていたのです。モスレイの場合は、彼は偽りの情報を利用し、他人から注意を受けてもそれを訂正しようとはしませんでした。たとえば彼はアダムスキ氏の円盤写真のD・P屋が死んだので、アダ氏の体験を確証することはできないと言っていますが、これはウソです。そのD・P屋は今日まで元気に生きていて、私の所から六〇マイル離れたケアリフォーニア州カールズバッドに住んでいます。

〔問九〕　あなたは地球人も他の遊星の人間も生まれかわりを体験すると言っておられますが、これは誤りです。〝オアスペー、生命の書〟を読んで下さい。

〔答一〕　ブラザーズによれば、肉体的な生まれかわりは高度に進化した遊星にもあるということです。忘れてならないのはニューブルー氏は軽い恍惚状態（トランス）でオアスペーを書いたという事実で、これは氏自身も言っています。このトランス状態にあると人間は多くのいかがわしい源泉にかかりやすくなります。九年後に氏はその著書の内容を大部分書き改めました。この種の心霊書にありがちなのは、多くの善き言葉がくだらない言葉と混ざっていることです。われわれは最新の知識に照らして書物の内容を判断する必要があります。

宇宙哲学

ジョージ・アダムスキ

宇宙哲学の定義

哲学とは知恵を愛することであると定義されてきた。それは生命の一哲学に応用されるような原理についての系統的な一般の概念であり、また心と物質の両面にわたるあらゆる現象の原因に関する知識である。

宇宙哲学は、それ自体において完全な、整然と調和した一つの組織体と考えられる宇宙を包括するものである。

心と物質にたいするわれわれの現在の知覚力は、理解をして、不断の学習を行なう教室の中で自分の席をとるために、〃因〃の領域にまで拡げられねばならない。

観察はわれわれの最上の教師だが、〃因〃をまたは万物が〃因〃と関連した目的を見ることをわれわれは学ぶ必要がある。

原理すなわち本源なるものと自然の諸法則は永遠に同じままにある。それらは不変であるからだ。法則にたいする人間の概念は、宇宙に関して人間の目的を知ろうとすればするほど拡がってゆく。

この太陽系内の姉妹遊星群に住む隣人たちは、宇宙の最も微小な分子のすべては他のあらゆる分子と相互関係にあることをずっと昔知ったのである。それに関して、生命の目的をほんの僅かでも知覚するためには、生命のあらゆる面が〃全体〃と関連して研究されねばならない。彼らは興味ある人のすべてに理論を伝えた。そして、彼らが深く探求するにつれて次第に諸理論は事実へと発展し、あらゆる生命を一体化させたのである。生物のいずれにも表現されている〃すべてを知る英知〃にたいするへりくだった尊敬の念と愛は彼らの天来の思想となった。子供たち自身の神性の個人的表現をうながすために、人間関係と行動主義が彼らの子供たちに教えられた。

知識にたいするあなたの探求の発石として役立つことを願いながら、私はひざまずいて次の各レッスンを捧げるものである。

緒言　真理とは何か

政治上の各党派は自己の意見の正しさを主張して互にやかましく騒ぎ合っている。哲学者や科学者は彼らのさまざまの説が正しいかどうかについて議論に余念がない。そして互いに相容れない思想の中心(複数)が世界中に勃興しつつあり、そのどれもが自分こそ絶対的な真理の唯一の伝え手であると公言するために、人間は一体何が真理なのかと迷っているのである。

思うに人間が存在してきた限り人間は真理をしっかりと握っていたにもかかわらず、それに気づくことなしに真理を求めてきた。

昔ローマ帝国がその栄光の極に達して、その支配力の重圧が多くの人々に感じられていた当時、そのさなかに一人の偉大な導師が磔げられた人々に告げた。「あなたがたは真理を知るであろう。そして真理はあなたがたに自由を得させるであろう」そこで救いを求める人々は叫んだ。「真理！自由になるための真理を与えよ！」人々は真理の意味を聞かされたが理解することは出来なかった。そして現在もわれわれはそのような言葉の反響、または「真理！真理とは何か？」と強く訴えながら長いあいだ身を震わせてきた無数の人々の声のこだまを聞いている。

そしてこのような探求の声のいずれにたいしても別な応答の声がある。

「我に従え。わが語る言葉こそ真理なり！」という応答だ。そこで人々は盲目的にそれに従うけれども、生命の目的を殆ど知りもしなければ理解もしていないのである。

そこで現代のあなたがたに――多くの物事について深い知識を身につけてこられたあなたがたに私は質問しよう。「真理とは何か？」と。

理想主義的な傾向の人は次のように答えるだろう。「それは実在だ」また非情な科学的な基礎の上に立っている人は「事実だ」と答えるだろう。あるいは、真理とは感覚の反対なるものかまたは善なるものだと言う人もあるだろう。始めの二つの回答をした人にたいしては、あなたが活動してきた限りはあなたは正しいと私は申し上げたい。しかし私はあなた自身で織った網であなたを捕え続けるだろう。真理とは善なるものであるというあとの答えは高尚な考を違いで言い逃れである。

それゆえ、ひとつほんとうの分析にとりかかることにしよう。真理とは一体何だろうか。あなたはそれを〝実在だ〟と言った。それで私が実在を定義していただきたいとお願いすれば、それは実際に存在するものだと言わざるを得なくなるだろう。しかしあなたは実在と非実在とを語っているのだ。あなたは〝実在〟にたいする一定の基準を持っている。知られているものすべては外見上存在しないと言われるものもりだろうか。とするとどうしてそれが知られるようになったのだろう。

真理とは事実だと言う人はどうだろう。その人は、それは証明され得るものだとなおも説明する。そこで次のようにお尋ねしよう。「誰に、そして何によって、しかもどれくらいのあいだ証明されたのか」と。ここでもその人は一定の区別の基準を持っているにちがいない。それはすでに認められている人間の法則か学説などによって証明されねばならないのだろうか。それは万人に証明されねばならないのか、それとも同胞の知覚力以上に物を見ることの出来る人だけに証明されねばならないのだろうか。証明というものは人間が認める限りにおいて役立つだけである。そして各人にとっての真理は心の実感によるかまたは肉体の表現によるかして本人が体験したものにすぎないのだ。しかし真理は普遍的なものである。それは活動の総計なのである。全宇宙の景小の振動のいずれも真理である。すなわちそれは活動を永続させるがために真実なのだ。私は私の言葉のすべてを完全に筋道の立った実験的な基礎に及ぼすつもりである。

世の中の偏狭さの殆どは真理についての誤った考え方のために起こるのである。同じ教室の中で少しばかりの知恵によって自分たちがそれぞれ紙一重の差があることがわかると、人々は真理についての各自の考えを主張して必死になって争い合う。しかし個人的な知能のいずれも理解力の程度でごく僅かな差があるという事実のために、各人にとっての真理はごく僅かな差があるのだ。偏狭さは誤解の特徴である。なぜなら、発達した知性ある人は各々分離した活動が相関的に真理であることを示す活動の連続を見ることが出来るからである。そして一つの疑問のあらゆる面が理解されるために本人は誰からも束縛されることはない。このタイプの知性を持つ人は真理全体の中の一つの局面だけを見る人を非難はしない。むしろその人が持っている考え方に付随する落とし穴または限界を指摘するのである。

真理とは活動である。すなわちその各部分が真理であるところの活動全体なのである。もろもろの小さな真理は大きな真理（後敎）となる。それで、誤りとして捨てられる一つの小さな真理は過去の歴史に示されるように文明の発達を妨げることになることもあるのだ。

人間は真理の意味を理解せず、それゆえに偏狭であるために、これま

に二千年以上の科学的な暗黒の期間があった。それはゆっくりと進歩する明度をより高い水準の人間らしい表現にまで高めるために応用され得たかもしれない。

「あなたがたは真理を知るだろう。そして真理はあなたがたを自由にするだろう」真理とは万物が真実であるということなのだ。――相関的な意味において真実なのであって、しかもこれは他のすべての部分にたいして相関的という意味なのである。しかし人間があらゆる活動の〝因〟を認めてそれに十分な考慮を払わぬ限り、決して自由にはなれない。人間の努力を結合させて共通の目的を認めてこそ、人間は文明を理解と進化の一体化した状態にすることが出来るのである。

真理とはいわば大きなはめ絵パズル――モザイクのようなものである。成熟した人は生命とは遂行されねばならない義務の連続であるということに気づくのである。生命について歪められた概念(複数)があるからといって一人だけが正しいことにはならない。いや、すべては真実なのだ。人間の心の中に抱かれる考えが何であっても、差し当りそれは本人にとって真理である。それはちょうど自然のあらゆる活動が創造的であっても崩壊的であっても真理であるのと同様である。他の真理(複数)に関連して建設的に用いるための十分な知識を持たないために人間の考えは愚かしく利用されるかもしれないが、だからといってその結果が犯罪事実になることにはならない。

それゆえ生命における人間の目的は真実なるものと真実ならざるものとを個人的に判断することではなくて、われわれが〝困難と結果〟の知識と一体化することが出来るように、われわれ自身を自然と同位にすることにあるのである。

弛緩

肉体的精神的な安らぎを得るための最も妥当な方法の一つは、肉体を弛緩させる能力を発達させることである。心理学、医学、スポーツなどのすべては、肉体が緊張していない場合に得られる有益な結果(複数)を認めている。しかし一般人は意のままに肉体を弛緩させることを困難に感じている。

弛緩に関しては誤った考えがあると私は思う。それは不活動の状態だとよく考えられていて、人々は次のように言うのである。「ああ、私は体を休める時間がない。仕事のために絶えず忙しいのだ」もし弛緩がほんとうに理解されれば、右のような人はいわゆる休息の期間よりも仕事中のほうにもっと大きな弛緩があることに気づくだろう。自然の法則は目的ある行為を要求している。もし人が自分の仕事に大きな興味を持つならば、本人は用いられるのを常に待っている エネルギーの自由な表現にたいする開いた経路になるのである。言いかえれば、何かの特別な仕事に夢中になっている人は、自由に流出するエネルギーにたいするいつもの肉体の抵抗を忘れており、それゆえ自分をその利益にたいして自動的に開いているのである。

弛緩は、調和した、抵抗のない活動を再開する過程として応用されねばならない。それはキリストの次の言葉を表わすほんとうの方法である。

「私の意志ではなく父の意志が行なわれるのだ」

弛緩は不活動ではない！人はきわめて平静になることはできるが、しかしそれはまだ弛緩ではない。昏睡の状態になることはできるし、それが弛緩だと解釈されるかもしれない。しかしそのような状態は釣合を失なうことによってひき起こされる結果にほかならないのであって、そのために肉体細胞の周波数を低下させて細胞を中途半端な昏睡状態にす

るのである。かかる状態は実際には破壊的なるがゆえに避けられねばならない。弛緩は心の真空状態をつくり出すことや活動の中止を意味するのではない。それは宇宙のより大いなる活動にたいして肉体の意識が自らを解放する手段であり、それゆえに肉体の如何なる部分にも休止の状態を起こしてはならないし、起こすことは出来ないのである。もし人が自己の内部に起こっているもっと精妙な激しい活動に気づかなければ、本人は弛緩しているのではなくてただ無関心の状態におちいっていることがはっきり言える筈である。

人は一種の自己催眠によって肉体を静めることは出来るが、これは弛緩ではない。それは肉体の諸要素の自由な活動を破壊するからである。肉体は微小な細胞から成っていて、各細胞には無限に放出できる潜在するエネルギーの生気がある。各細胞内のこの生気すなわち細胞核は肉体に活気を与えるエネルギーである。しかしこの中心の核を固む分子（複数）が大体において緊張した状態に保たれているために、それらは内部のエネルギーにたいする障壁または抵抗器として作用する。この緊張状態が解き放たれると、各細胞を構成しているその外殻の物質は中心のエネルギーにたいして受容的となり、透過力の作用によって高次な振動にさせられるのである。

弛緩は細胞同志の互いにたいする抵抗を除くことによって肉体内の摩擦を減らすのである。たとえば、沢山の魚が非常に小さな鉢のなかに入れられるとすれば、魚たちのあいだに避け得られない接触が起こるために絶え間のない摩擦が生じるだろう。そして鉢のなかの混雑した状態のために魚の活動は妨害されるだろう。しかしこの魚たちを大きな池のなかへ放ってやれば、それらは互いに衝突することなしに楽に泳ぎまわるだろう。魚たちは自分らが持っている潜在するエネルギーを利用する状態におかれるだろう。肉体内の細胞群もこれと同様に作用するのである。そして細胞の目的の自由な遂行のためにその細胞群を解放するのは肉体の感覚器官（センス・マインド）の心なのである。

一般の人は自分が自分自身の意見によって如何に完全に縛られて制限されているかに気づいていない。緊張は全く個人的な自我によってひき起こされる状態である。すなわち所有欲、貪欲、恐怖、強欲、我欲などのすべては肉体内に固定した強情な状態を生み出すのだ。きわめて積極的な人は弛緩を最も困難なことだと感じるが、それは弛緩が解放と非抵抗から成っているからである。それは常に保たれねばならない自然の状態であるが、利己的な興味あることのみに熱中している人はその状態を保つことはできない。

最初、人間は満足と弛緩の状態で生きていた。人間は〝次の物〟とか〝わが物〟の区別を知らなかったからである。人間は〝父〟によって完全に導かれていた。そして人間の意識的な想念のいずれもその純粋な想念の状態で自由に完全に遂行された。ところが人間が緊張するようになったのはまさに自由な活動にたいする抵抗をつくり上げたときであった。その結果は苦痛、病気、死などである。

弛緩の状態になると、招き寄せようとするすべての人にとって自由は存在であるところの無限の意識のエネルギーにたいして、弛緩した本人は柔軟になり受容的になる。生命とエネルギーは無制限なものであるけれども、われわれは自分が受け入れようとするだけの生命とエネルギーを受け入れることができるだけなのである。

金星の人々はこの法則のもとに生きているので、われわれが地上で堪えねばならないようなさまざまの不愉快な状態に直面することはない。

人間は生命の充実を表現することはできるが、もしそれを自分を通

じて表現させたいのなら、宇宙のエネルギーにたいして非抵抗の状態にならなければならない。人間は個人の自我を高揚することによって活動のほんとうの針路を失ってしまっている。あらゆる物事の成就は個人的な努力によって達成されると思い込む習慣を身につけてしまったのである。努力ということにこだわるならば全く自然の様相で起こってくるさまざまの状態を力ずくめで行なわうとすることによって自分を不必要に疲れさせるのだ。個人的な優越的態度のために多くのエネルギーが浪費されている。非個人的な非抵抗がエネルギーの自由な流出を起こさせるということ、平常な場合が摩擦の場合よりもっと激しい活動が行なわれるということなどを人間が理解するのはむつかしいのである。人間は全く低次な粗雑な振動に気づくようになってしまったために、精妙なもっと静かな平安な状態の活動に気づくことはできない。非抵抗な受容的な態度で生きる人は真実な幸福の源泉を見出している。本人は疲れ、苦痛、失望などを知らないからである。

肉体的な活動を行なう際は奮闘しなければならないとか、著しい物事を達成するためには個人的な物凄い努力の跡を見せねばならないといった考え方は誤った信念なのである。最高の達成という高所に到達する人とは、自己の諸活動のすべてを静穏な安らかな状態にとどめて、自分は英知の躍動者または投影者なのではなくてその英知を現象の世界に流出せしめるための"物"にすぎないという事実を認める人である。活動にたいして感受者が清澄化されればされるほどその活動は大きくなるのである。

われわれの生活により、多くのエネルギーと知恵をもたらすものは、個人的な意志の遂行ではなくて個人を非個人的な意志のほうへ解放することである。われわれは"利己"主義なる障壁をとり除きさえすればよい。そうすれば理解の潮がわれわれ自身に流れ込んで来て、やがてわれわれはその潮の活動のなかに浸るようになるのである。

宇宙の言語

近年になってこの文明の歴史にかつてないほどの友好精神にたいする大きな気運が生じてきた。ラジオ、テレビなどの発明は世界を共通の関係に結びつけている。異なる国々の人々のあいだの意志交換が楽になるように一つの共通の言語を作る可能性について各国の学者間に多くの討論がなされてきた。

しかし気づいている人は殆どいないけれどもそこには一つの世界共通語が存在しているのである。それは人間の表現ばかりでなくあらゆる生きものの表現をも含んだ言語であり、またきわめて簡単であるために新しく生まれた赤ん坊にさえも理解できる言語である。

われわれは人間同志のあいだに一つの世界共通語の理想を描いてきた。これはわれわれが人間の音声を理解することができるということに気づいていて、人間の音声なるものはその人の心を通過する想念をわれわれのために説明してくれるためのものと考える習慣を発達させたからである。しかしわれわれの言語単一化の努力においてわれわれは人間の言葉以外の何物をも含んではいない。一体なぜこうならなくてはいけないのだろうか。自然それ自体の言語よりもかくも異なったさまざまの言語を作り上げる音声があるのだろうか・人類の異なる種族がさまざまの音声や音の結合でもって話しているように、この世の生きものすべてが同じようにやっているのである。しかしわれわれはそれらの生きものの言語を理解しようとはしない・人間は自己を生命の一面にだけ閉じ込めてしまい、宇宙の広大さにたいしてドアーを閉ざしてしまっている・これ

は外界の事物から来る印象を受けるところの肉体の感覚器官のみを人間が認めているという事実によるものである。人間は肉体の聴覚器官に刺激を与えるだけの粗雑な音響のみを聴きとろうとする。そこで全般的な宇宙の言語を解釈する能力を失っているのである。この宇宙の言語とは何だろうか。それは意識的な感覚なのである。すなわちあらゆる形あるものを通じて語っていて、それゆえにすべてを不可分な一体に結びつけている声なのである。宇宙にはこの意識的な感覚としての声によって人間に語りかけることのできないものは存在しないし、またその言語を理解できないものは何ひとつとして存在しない。それは最大の物を通じて語るのと同じくらい明瞭に最小の物を通じても語っている。

あなたは宇宙のあらゆるものと関係がある。意識という言語は万物によって語されているので、あなたが絶えずこの事実に気づいているならば、あなたにとってあらゆる生きものを理解できる時が来るのである。樹木に茂る葉、小鳥のさえずり、カエルの鳴き声、蜜蜂の唸り音、すべてがあなたに語りかけるのであり、あなたは各個別化した経路を通じて現われている生命を理解するだろう。最も小さな音響のいずれも人間の声と異ならない音響になるだろう。そしてあなたはすべての生きものの意識を感じるだろう。

たとえば、人はなぜ音楽に感銘を受けるのだろうか。それは人間が語すような言葉を語しはしないが、やはり或るメロディーは大きな喜びの感情を生み出し、或るメロディーは悲しみの感情を起こさせたりする。また別なメロディーは人を意気揚々たる状態にもする。それは音楽の大家に影響を与えるのと全く同様に、その調和の科学を全然研究したことのない人にも影響を与える。音楽は世界共通語だ。それは〃基本的な感覚〃を通じて解釈されるからである。

なぜ人間は春になるときわめて喜ばしくなり、生気溌剌としてくるのだろう。また年の暮れとともにホッとするような感じが湧き起こってくるのはなぜだろう。自然は宇宙の言語を語しているために、人間はそれに気づいていようがいまいがその言語を理解し、それによって影響を受けているのである。

或る普遍的な言語が存在するということが事実でないとすれば、動物を人間の命令通りに行動させるように訓練することがどうしてできるだろう。ノミのような小さな虫でさえも完全に演技させるように馴らすことができるのである。これら動物の行動を導くものはたしかに人間の声またはフランス語、英語、スペイン語などで語される言語ではなく、それは如何なる可聴的な言葉以上に明瞭に語っている意識的な感覚という声なのである。

宇宙の言語は音響、光、想念の波動である。それはただ一つの声、すなわち大きな感覚の声なのである。それは雷鳴のすさまじい轟きとなって語し、またわれわれの最も深い休息のなかにも語している。

人間の最大の力はこの宇宙の言語を認識することのなかにいそんでいる。なぜなら、最小の原子のいずれもが人間の語す言語を理解することができるということに人間が気づくとき、人間は深い確信をもって非個人的に命令することになり、下等な生きものすべては人間に従うことになるからである。人間は自ら大きな達成の高所にまで昇るだろう。彼は最大のものと最小のものを知ることになり、それらを統一された行動に導くことができるからだ。

意識の低次な声である音響という媒介を通じて現われる言語について私は語ってきたが、ここで想念について考えてみよう。ここでわれわれは一歩高い段を昇ったことになる。というのは、この伝達の形式を通じ

てわれわれは時間と空間を排除してきたからである。想念という媒介を通じてわれわれは数千マイル彼方の人に話しかけることもできるし、しかもこの連絡は殆ど瞬時になされるのだ。この意志伝達の手段によってわれわれは相手の肉体が睡眠状態にあっても話しかけることができる。意識的な想念というものは時間、空間、または諸条件によって妨げられることなく働くところの使者なのである。

かかる伝達の形式はアテになるものではなくウソだと言われてきた。想念が宇宙的な源泉から放射されたにせよ個人的な径路を通じて放射されたにせよ、われわれは意識的な想念の声によって絶えず導かれているのである。意識の君そのものにほかならない個人の直感力なるものに或る程度気づいていない人はない。

元素の支配においていわゆる奇蹟を演じた偉大な人々は、もし彼らが感覚の言語を理解せず、あらゆる生きものも同じ知覚力を有しているということに気づかなかったならば、その奇蹟をなしとげることはできなかったことだろう。人間の直感力、動物の本能、物質の原子の親和力や吸引力などのすべてが宇宙の言語の証拠である・全太陽系内の最小の振動のいずれも意識という声によって語されている言葉であって、人間の肉体の感覚器官がエネルギーの最小の運動にさえも気づくようになる場所にたいしてその感覚器官を警戒させるならば、本人は自分を〝宇宙の知恵の殿堂〟から分離させている神秘のヴェールを取除くことになるのである。

化学的な宇宙

この世には宇宙の言語を語さぬものはなく、また、われわれが観察する物の振動に注意を払うならば宇宙の秘密を洩らさぬものはない。われわれが宇宙の理解を得ることができるのはこの小さな世界を通じてこそできるのであって、かかる知識が得られるのは、大地、空気、その他地上のさまざまの形あるものを構成している諸元素に関して不断の探求を続けることによるのである。

宇宙は常に活動し変化していて、科学的な問題について一般の素人が如何に興味を持たなくても、一瞬一瞬自己の周囲に行なわれているその絶え間のない活動を意識していない人はこの世にいない。草花や樹木の生長、降雨や降雪、液体の蒸発、熱の影響下にある金属の膨張及び低温下の収縮、植物性物質の醗酵、無機物の酸化など、形あるものの絶えざる構成と崩壊に最も観察力のない人でさえも注意を払わざるを得ないのである。もしわれわれが燃える丸太から立ち昇るガス類や、火が燃えつきたあとで残った灰などのすべてを注意深く集めることが出来たならば、その変形の過程において失われた物は何もないことに気づくだろう。完全な破壊というものは存在しないのだ。宗教家はこの変化する現象のすべてを多少とも無関心に眺めて、それを〝神の業〟と名付け、そのうわべだけで価値を認めるけれども、科学者は外観を超えて飛躍し、全体として生命は不断の化学作用の結果であること、及び〝原因〟の知識になれば化学こそ生と死、創造と再創造、歓喜と苦痛などにたいして勝利を握っているという興味ある啓発的な事実を明らかにした。宇宙は巨大な科学研究所以外の何物でもなく、その内部では現象の無数の形態を造り出すために諸元素が絶えず結合しつつある。水、火、土、空気及び大気圏上の想像もつかないような精妙なエーテルなどはすべて化学的な合成物である。光と暗黒、愛情や恐怖などもすべて化学的な反応なのである。

人間の想念でさえも化学的な合成物の性質をもっている。われわれは人間の肉体が無数の化学物質で構成されていることをよく知っている。

またわれわれは一つの意識的な想念が充満しない限り肉体が活動しないことも知っている。人間が無意識な状態にあればその肉体は活動しない。肉体の各器官はその器官を構成している細胞間に起こる微小な化学反応によって作用し続けるということは事実であるが、それさえも際限なく続きはしない。如何なる肉体の運動といえどもその肉体を構成している諸元素の化学反応なくして起こることはない。エネルギーを生み出すためには化学反応を必要とするからである。潜在する力は物質の各原子のなかの〝父母化学物質〟として存在するが、あらゆる形あるものの活動の奉仕にとって必要な運動のエネルギーとして知られるものを生み出すのはこれらの諸元素の反応なのである。異なる化学物質だけが化学反応を生み出すのであって、想念が肉体の活動にとって必要であるという事実は、想念自体が化学物質であることを意味することになる。たとえば誰かが心のうだやかな状態にある場合、本人は食物を食べることができ、その肉体はいささかの対抗的な反撥もなくミネラルを消化するが、上等な食事をする際にその肉体へ憎悪または恐怖などの激しく集中化された想念をとり入れるならば、化学物質の反応はただちに医師かまたはかなりの量の重炭酸ソーダを必要とするだろう。恐怖、憎悪、利己主義、羨望などはそれが肉体内の化学物質と混ざるとき激しい反応を生み出す要素となるのである。化学的な燃焼以外の何物でもない発作的な怒りは胃くはど肉体を破壊し、苦痛として知られるものを生み出すのである。もし科学者がその研究室内で或る元素類を親和の法則に従って化合させて調和した結果を生じさせるならば、彼は嘉われるけれども、もし誤った化学物質を混ぜ合わせると自分自身を粉々にするかもしれない。火のなかに入れられた丸太がその目的を果たしてその元素類は変化しても破壊されないのと同様に、如何なる形あるものの元の元素類は永遠に存在するのである。水の存在していた場所は乾くかもしれないが、その液体を構成していた水素と酸素はいつまでも存在し続けて、いつでも物体に立ち返るかもしれない。人間の〝人柄〟をつくり出すのは化学物質の動・反動なのであって、そのためにこそ〝人柄〟は常に変化していなければならないのだが、元の各元素の総計である霊魂は同じままで、すなわち破壊されることなく永遠に生き続けるのである。

古代の知恵か現代の進歩か

人間の心には過去を讃えることによって大きな満足を味わうらしい奇妙な特性がある。東洋人は祖先を崇拝することにこの特性をあらわしている。西洋人はすでになくなってしまった偶像を優しんで常に英雄崇拝を続けてきた。各国の故老たちは安楽椅子にもたれて〝古きよき時代〟を回想する。たぶんそれは過去の実際の現実を〝時〟がやわらげて、自らつくり出したさまざまのイメージの多彩な光景を残しているからだろう。また、いずれの方面に野蛮があってもとにかく遠方の野蛮が一そう青々と見えるのだろう。しかしとにかく過去を求めて生きている人が非常に多いために、われわれは現代において〝現在〟なるものがどんなに役立っているかを考えさせられるのである。

多くの宗教団体、特に心霊研究団体などのあいだで、われわれは古代人の偉大な知恵についてずいぶん聞かされている。「あなたがすばらしい活動状態にまで自分を高めたいと思えば、古代にかえって古代人の教えを研究しなければならない」と言う。これは少々歪められて聞こえるのではあるまいか。進化するために昔にかえらねばならぬとは！一体なぜか。進化とは拡張であり生長であるのだ。樹木は生長してゆくうちに元の根になるだろうか。そんなことになればわれわれはその果実を決

して味わうことはできないだろう。

誰でも自分の手のなかに持っている物に満足する人はいないだろうと私は思う。ゆえに手を伸ばして何か新しい物を掴もうとするのは当然のことであって、それは前進というべきで後退ではない。なぜ尋ねかえった過去をせんさくするのだろう。過去はその役割を果たしたのだ。過去はわれわれを現代にもたらしてくれたのだ。もうソッとしておこうではないか。過去のもろもろの業績は現在のわれわれに役立つことはない。そして過去の諸法則に関する限り、われわれはそれをいま応用しつつある。なぜなら全宇宙には活動のただ一つの原理が存在するからである。それは無数のさまざまの現象のなかに応用されるが、それ自体は決して変わることはない。われわれがその原理を証明し得る唯一の方法は生み出された結果によるのであって、たしかにわれわれは古代人がやったよりもはるかに大きなスケールで結果を生み出しつつあるのである。古代においては誰かが人類に役立つ物を発明したならば、その人は神とみなされ、その開発は奇蹟と考えられた。今日われわれは殆ど毎日のように新発明をしているけれども、それを何とも思いはしない。

「われわれはまだ〝古代の知恵〟の偉大さすべてを発見していない」とも聞かされている。それもほんとうかもしれないが、敢えて言うけれども、もし数人の古代人が突然現代の大都市へ連れてこられたとすれば、彼らは現代人の奇蹟的な業績に呆気にとられるだろう。彼らはたぶん自分たちが特別に進歩した人のために準備されているどこかの〝世界〟へ来たのだと思うだろう。そしてしばらくのあいだそこに住んで自分たちを現代人の理解力に合わせてから、自分たちが実は選ばれた人間ではなく、誤ってこの驚くべき場所へ迷い込んだにちがいないと考えるだろう。

一体なぜわれわれは現代の生活を古代の哲学に基礎づけねばならないというのか。牛車に立ち返ることを楽しむ必要があるだろうか。世界の人口の大部分は牛車の輸送に頼っていては餓死するだろうと私は思う。いわゆる心霊研究家のなかには、古代の神話と儀式というのろい家物で運ばれて来る貧弱な精神的な糧のために飢えている者がある。われわれはこれまでにないほど急速に進行しつつあって、現代の進化の状態に遅れをとってはならないように強いられている。われわれの心の拡がりは機械の発達と一致してそれを支持しなければならないのである。あまりに過去に執着している人々は、なぜそんなに突進するのか、そしてどこへ行こうというのかと尋ねる。私は次のように答えよう。われわれは目的のない突進などする必要はなく、ただ急速に動く生活上の出来事に遅れをとってはならないのだと。

知恵の欠乏のために現代の文明は破壊に近づいていると予言する人々がいる。たぶんそうかもしれない。しかし過去にかえって古代人の知恵を研究することがわれわれにはなにほどの利益をもたらすだろう。古代の各文明は古代人に与えられた知恵の言葉に注意を払わなかったとわれわれは言うことができるだろう。そしてそれは真実なのである。レムリア、アトランティス、エジプト、ローマなどすべては偉大な文明であったが、みな過ぎ去ってしまった。今は新しい諸問題をかかえた新しい時代なのであって、〝宇宙の知恵と知識の貯蔵庫〟にたいするドアーは各人がそこへ入るために広く開放されているのである。われわれの現在の問題はわれわれのバランスを保つことになるのだ。結果の世界に生きて原因を追求しているのである。

ヒンドゥー人のあいだには、夜中に露営火に木を積み重ねれば重ねるほど明るさは増すけれども、その周囲の暗闇も深くなるという意味のことわざがある。この露営火の明るさに似たわれわれの現代の知恵はかなり

なものがある。それゆえ、われわれが学べば学ぶほど、人間がまだ解読していないさまざまの可能性に関する知覚の範囲は拡がってくる。われわれが知識を得れば得るほど、学ばねばならぬことが如何に多くあるかということを知るのである。われわれが知覚する世界はきわめて広大になってきたので、周囲の暗闇もゾッとするほどのものになっているけれども、立証されない物事についてかかる大きな知覚力をわれわれが持っているという事実そのものは、その物事がいつか立証されるということを意味する。われわれは宇宙を通って他の諸遊星へ進行している宇宙機に気づいている。そしてちょうどジェット機や無空機類が現在一般的な輸送手段となっているように、それが実現するようになる日は遠くはない。

われわれは昔の錬金術師について多くの事柄を聞いている。たとえば下等な金属を黄金に変えたといわれるパラセルサスなどを知っている。「奇跡だ！」と人々は言う。現代の科学者は他の物質から黄金を作り出すことができるが、その方法にあまり費用がかかりすぎて実用化には至らない。

古代の僧侶たちは当時の唯一の科学者であった。彼らがなしとげた物は何でも人を支配するための利己的な目的のために用いられた。香料として用いるならば人を恍惚状態におとしいれるような化学物質を彼らは作ることができたと言われている。しかしこんな事を行なって実際にどんな利益があるだろう。たしかに僧侶にとってはかなりの利益があったことだろう。というのは、被術者がかかる魔力にかけられるならば僧侶は彼らの財産のすべてをいとも容易にふんだくることができたからだ。そしてその演技の幕は最も都合のよい神々のドアーのところに設けられていたのである。

今日、科学者は彼らの知識を実際的に応用している。彼らは伸びゆく技術上の業績の必要に応じるために新しい金属を作り出しており、進化という車輪の回転を促進するために自然の力を動力に利用している。宗教家が無神論者と呼んだこの科学者たちは、あの〝一つの原理〟が万物を支配していることを認めることによって諸元素の支配者になりつつある。

われわれはこの地球の人類間に友好の時代を期待している。そして真の活動の諸法則を発見してこの達成の方向に長足の進歩をとげているのは科学者なのである。科学は相互扶助の法則のもとに活動しているけれども、宗教は分裂の法則のもとに活動している。科学上の探求の仕事によって人間は宇宙には利己主義、頑迷、狂信または偏狭などの余地はないという広大な知覚に達するのである。実際に創造物を探求する人はその無限の活動に没頭するので区別ということをしなくなる。彼らは人間の皮膚の色が白かろうが黒かろうが兄弟として万人を尊敬し、それぞれの理解の能力に応じて信ずべき権利を万人に与えるのである。彼らは型や教義や独断説などに縛られることはなく、常に新しい啓示にたいして開放的である。彼らは人体それ自体にさえも知識の分野における彼らの探求の道を妨げることを許さない。なぜなら彼らは自己の肉体を全般的に他の探求者と人類の利益のために喜んで捧げるからである。

科学はこの数年間急速に進歩してきた。現在、優秀な器材や国際地球観測年の研究、及び人工衛星などの助けをかりて、科学者は益々深く〝因〟の領域を探求することが可能である。彼らは〝自然の創造的数学〟を理解し応用し始めている。すなわち、1プラス1は3という数学である。探求の分野が拡がるにつれて、古い理論はもっと実際的

な知識と置き換えられつつあるのだ。

われわれが言い得るのは、科学的な探求によってこそ世界の人々は〝宇宙の実在〟をより親しく観ることができるということである。

私がここでいう科学者というのは、原因から結果へと探求する理想的な科学者なのであって、結果の世界以上を見ようとしない独断的な正統派のことではない。

〝自然の創造的数学〟において1プラス1が3になるという理由をここで説明しておくのが適当であろう。陽と陰とが合体すると一つの現象が生まれる。電気においては光となり、男と女とにおいては子供ができるように、自然全体がそうなのである。現象化された結果を理解するためには、それを生ぜしめた諸条件が理解されねばならない。

過去の文明

私は最近レムリアとトリテリアン種族に関する記録を読みなおしたので、読者がどのような興味をもたれるか知らないが、とにかくそれについてお伝えすることにしよう。他の諸遊星から来た私の友人たちが私に語ったところによると、現在彼らの遊星に住んでいる人々の多くはかつて地球上に住んだことがあるという。

よくアカシック・レコードと言われる宇宙の記憶の書のなかには、無数の年月を通じて行なわれてきた活動の物語が收められている。絶えず活動する意識の指はあらゆる運動と現象の明白な破壊できない型を〝宇宙の基本的な実体〟の上に記している。石碑や羊皮紙や紙などに書かれた人類の歴史は存在物の限りある記録にすぎず、そのため未来の世代の知識にとって容易に失われるのであるが、〝宇宙の記録〟は永遠の建造物なのであって、その記録を読むことのできる人は生命の歴史における真を失うことはないのである。

万人に開かれるだろうと聖句がわれわれに語っているその〝記憶の書〟から、われわれは太平洋の暗黒の海底に沈んだあの神秘の大陸レムリアの物語を読んでいる。

レムリアは太平洋の諸島――ハワイ、イースター諸島、ニュージーランド、フィリピン、その他の小さな群島の殆どを含む広大な大陸であった。これらの諸島はかつて現在沈下している大陸の最高の山々の峯々であった。レムリアはかつて世界の文明国であった。その住民は高い教養をもち、すぐれた〝原因と結果〟の知識を有していた。彼らは自我のためでなく〝全体〟のために生き、万物を〝宇宙の英知〟の表現とみなした。各人は自分自身が宇宙の力の召し使いであることを知っていた。彼らは一個人が他人よりもすぐれているとか、或る仕事が他の仕事よりも重要であるとかいった考えをもつことなしに、穏やかな態度で自己の義務を遂行した。彼らの間に嫉妬や貪欲は存在しなかった。すなわちレムリア大陸は不和を知らず、平等のゆきわたった幸福な一大家族の家であったのである。

レムリア人は褐色の皮膚を持つ人種で、その平均身長は約五フィート三インチであったが、ときには巨人も現われた。現代のアラスカ人は他の如何なる民族よりもレムリア人に似ている。

彼らはきわめて勤勉で活動的な人種であり、高度の感受性と直感力とを持っていた。彼らは精神感応（メンタル・テレパシー）の方法によって互いに会話を交わすことができたし、彼らの活動は主として自己の実体のより大きな英知によって導かれたので、彼らは驚くべき業績をあげることができた。彼らは宇宙の科学において高度に進歩していた。そして活動の諸法則に関する彼らの理解力によって、地球の諸元素にたいする素晴らしい支配力を持っ

「ことりたちのである。

鉱山中の鉱物は彼らのすぐれた感覚によって発見された。そして彼らは元素のすべてを利用した。

彼らの建築様式と芸術作品は構成と美において素晴らしいものであった。彼らの寺院は礼拝用というよりもむしろ彼らが日常の活動で奉仕した、全能の力にたいして捧げられた美の記念碑であった。これはこの古代の民族が中へ入って礼拝すべき寺院というものは必要としなかったためである。すなわち、彼らは自己の内部や地上の生きものすべての中に絶えず全宇宙を認識していたのである。当初彼らの理想主義は人間の中に現われているとされた神の徳であった。そしてこの理想主義のために彼らは現代人に知られていない力（複数）を与えられた。レムリア人は自然の諸法則を適用したり誤用したりはしなかった。そして彼らがその帝国を建設していたあいだは、それは地上における実際の天国であった。

しかし事実上あらゆる文明と同様に、彼らはやがて没落したのである。徳性は貪欲と利己主義のなかに失われてしまい、その末期は現代の文明と変らなかった。ついに自然が関係してその大陸は太平洋の海底に沈んだのである。

レムリアの黄金時代はほぼ三千年続いている。この期間中にレムリア人はエジプト及びアジア各国のすべてと接触したが、レムリアが世界の他の国々から来た利己的な民族によって侵略されたのはその黄金時代が過ぎてからであった。当時、現在ギリシヤ、ローマとして知られている地域から来た人々がいて、レムリアに定着したのである。この人々は軽薄な種族だったが、レムリア人の信用を得て互いに結婚し合い、次第にこの平穏な民族の清純な思想を汚していった。この異分子はゆっくりとレムリアの支配権を握ったのである。彼らは無情な恐ろしい支配者で、富と権力を求めて貪欲であった。彼らは傲慢を示し始め、レムリア人の心に不平等の思想を染み込ませ始めたのである。その民族がかつては活動の愛のために互いに奉仕し合った土地で、今や彼らは少数者を富ませ、それに権力を与えることを強いられた。彼らは謀反と利己主義と貪欲の意味を知った――これらはそれまで決して彼らのあいだに存在しなかったものである。彼らは支配者の範を見習うことを知り、〝全体〟のかわりに自我のために働くことを知った。彼らは自己の創造者の導きにたいして自己を閉ざし、肉体の表現の方向に転じたのである。

これは数百年間続いたが、ついに自然の力は彼らのアンバランスな状態にたいして代償を要求した――苦痛という代償である。もしこのアンバランスな状態が続くならば未来に破壊が起こるという警告を与えられたけれども、彼らはそれを心に留めなかった。そこで自然は彼らにそむいたのである。大地は彼らの足元で揺れ始めた。津波は沿岸を洗い流し、最後に連続的な地震が全レムリアを襲った。約七カ月のあいだこの地震は続いて次第に大陸は沈み始めた。海水が押し寄せて、かつての天国の如き王国を覆い、かくて一つの文明が失われたのである。

この地震と大陸の沈下は自然の諸原因によるものであった。地表の変化は一定の期間ごとに来るものだが、レムリアの人々はあまりに現象の世界にとらわれてしまったために、彼らは自然から与えられる警告に注意を払わなかったのである。もし彼らがその徴候に気づいていたならば安全な地帯へ移動することができたであろう。

如何なる民族のバイブルのなかにも、一つの創造の物語と人間が完全な状態で生きたというエデンに関する示唆がある。しかしそれは結局示唆にすぎず、人類はそれを現代の状態における人間の進化に向ら

の影響をもたない一編の美しい神話だとしか考えなかった。しかし意識という年代記のなかには神の如き人々とそのエデン的な国を持った或る種族に関する事実が found されている。

この文明人はトリテリア民族と呼ばれた。そしてこの民族の記憶からギリシヤ初期のトリトン神なるものが生じたのである。このギリシヤの神は半人半魚として描かれたが、それはトリテリア族を〝波の人々〟と語っている宇宙の記録と一致するものである。もちろん彼らは半人半魚ではなくて水と大地の両方の支配者であった。

理想主義者はときとして完全な人間なるものを宇宙的実体として描き、天上の栄光の世界にのみ住んでいて、自然の法則に打ち勝つ力を持っていると考えてきた。しかし、われわれはトリテリア族が肉体をもって地上に生きた人間で、自然の法則に完全に協力した人々であることがわかるのである。

彼らは大きな体格の人々で、その皮膚はわれわれの銅またはサビ色にたとえてよいだろう。それはおそらく当時地上に降りそそいだ激烈な太陽光線によってそのような色になったものと思われる。

この偉大な民族は宇宙人であった。そして彼らが地球上の体験を得ながらすごしていたあいだ、彼らは自身を〝全体〟から分離させなかった。彼らは現代人がやっているように地球の諸元素を研究したが、しかし元素機が現象化している原因を理解していた。彼らは物質の知識を得るためにこの太陽系へ派遣されて来たのであって、〝因の英知〟の指導のもとにこれをなし遂げたのである。彼らにとってこれをなすのは容易なことであった。あらゆる活動を支配する自然の法則を彼らは知っていたからであり、また悪用することなしに自らの知識を応用できるほどに賢明であったからである。〝親和の法則〟はこの人々に何らの神秘感をも起こさせなかった。そして諸元素は完全に彼らの命令に従ったのである。地上はエデン的な美の完全な表現であった。

トリテリア人は現在行なわれているような宗教を持たなかった。――彼らは科学者の民族であった。彼らは想像や神話でなく事実に基づいて活動したからである。彼らは神々を持たず、全英知を持つ力を認めて自身をその表現とみなした。また彼らは原因と結果とを理解していたために、肉体の心が創造者を審くような誤ちをおかすことはしなかった。自分たちと宇宙の意識とのあいだに分裂感を起こすこともなかった。彼らは自由と成就の確信とをもって活動したのである。それゆえ生活は平安で調和に満ちていた。彼らは神々や悪魔に縛られることはなかった。彼らの知覚の状態だけが混和された活動の状態であったからである。創造における二元性の必要を認めたけれども、その力を善と悪とに分けることはしなかった。

生命力にたいする摩擦や抵抗がなかったために彼らの肉体は常に若さを保ち、われわれが知っているような死は存在しなかった。

地球のこの学士たちのあいだには貪欲や利己主義はなかった（今日の言葉で言えば、彼らはあらゆる部門において彼らの学士（マスター）の学位を得ていたと言えるだろう）。彼らは宇宙の物質は制限がなく、破壊もできぬこと、それゆえにあらゆる必要を充たすには常に十分であることを知っていた。誰も物質的な富の蓄積にふけるものはなかった。

現在、トリテリア人の子孫はいない。というわけは、彼らはこの地球上で一定の期間奉仕したのち、他の太陽系へ宇宙船で運ばれたからである。これは聖書時代に先立って地上に住んだ種族である。人類の堕落はレムリア人の出現までは起こらなかったのだ。トリテリア人は純潔な状態で地球を去って行き、より大いなる奉仕に近づいていったが、彼らに

従った各種族のすべては現在もなお宇宙の生得権を取り返すために生きて努力している。トリテリア人は直感力と従順さとによって宇宙を探求したけれども、他の種族は苦痛と結果の観察によって自己の知覚力を得ることを選んできた。そして肉体人間としての概念の束縛のなかに生きているのである。

われわれがもう一度あらゆる生命の一体性に目覚めるならば、われわれの自然の天性への復帰はトリテリア人のそれと同様に栄光あるものとなるだろう。

宇宙人が私に語ったところによると、地球上の諸文明に関する記録が彼らの図書館に保存してあるということで、またレムリアとトリテリアについての以上の説明は正しいということであった。（註。以下次号）

練習法

毎日わずか数分ずつでもあなたの想念を検査し続けるには簡単な方法がある。先ず手帳を用意して各頁をタテに二分し、左側には〝非利己的なこと、理解を得たこと、あらゆる生命が宇宙的に一体であることを自分に思い出させるようなこと〟などに関する想念を書きとどめ、右側には〝利己的なこと、不安、不満足、他人にたいする非難、結果だけを見て原因を見ないこと〟などに関する想念を書き記すのである。かくして、絶えず自分の精神状態の観察者となり、一日の終りに総計を出す。これが或る期間続くと、心と肉体に混乱をひき起こしていた自分の古い習慣的想念がいつのまにか消えていることがわかるのである。

（次号より）

ます。あなたは現在の自我の師としてあなたの〝真実の自我〟を用いようとしています。以上の方法を用いるならば、生命のあらゆる分野に学習の終りはありません。

〝宇宙哲学〟の読み方

C・A・ハニー

この書物から最上の結果を得るためには、先ず鉛筆と紙を用意して下さい。あなたが各頁、各行を読むにつれて、あなたが受ける印象のすべてを片っぱしから書き留めるのです。一時にあまり多くを読んではいけません。最上の結果を得るには、一頁を読んでそれから先へ進まないで自分の印象をすべて書き留めることです。

このようにして書物の全部を読み終ったならば、もう一度読み返して下さい。すると今度はあなたの印象が変化していることに気づくでしょう。しかしそれらの印象は第一回目のもろもろの印象と混ざり合います。このことは自己発展の過程なのです。続いて書物を何度も読み返して下さい。そして読むたびにあなたの印象をノートにとるのです。あなたは読むたびに新しい印象を受けるでしょう。

このことはあなたがこの書を読むにつれてますます高く進歩しつつあることを示しています。これはあなたをあなた自身の師にします。絶えずノートをとることを忘れてはいけません。ときどきその感想を読んで、それらの感想がどんなふうに互いに混ざり合っているかを調べてみて下さい。そしてその書物からあなたがこれ以上新しい印象を受けないようになるまでこれを続けて下さい。

そうするうちに、あなたは自分の書物を書いてしまったことになります。あなた自身の発達を続けるためには、あなたが読み進むにつれてノートをとっていったのと同じ方法をくり返して下さい。こうしてあなたはこれ以上に何らの援助なくして、生きる限り発達を続けることになり

（上段へ続く）

―編集後記―

● 今回より〝宇宙哲学〟を連載します。全訳ですが、都合により各章は必ずしも原書の内容どおりの順序になってはいません。しかし物語ではありませんので、どこから読んでも差し支えないものと存じます。巻末の〝練習法〟はア氏著の〝精神感応〟にも述べてあった〝精神白紙〟を作る方法と大体同じで、ハニー氏もこれを勧めているところから、とにかく自己の想念や印象の観察結果を絶えず記録するということは真実のテレパシーの能力をひき出す上にも重要な意義をもつものと思われます。ア氏の哲学はいわゆる宗教的な〝祈り〟や〝思念〟によって物事を成就せしめようというのではなく、自己を〝自然〟に近づけようということに重点をおいています。したがってグリ文チャン・サイエンス系統の光明哲学とは似ているようでも根本的に異なります。そして、人間の背後霊団の守護を祈願したりすることをきわめて低次な段階としていることはいうまでもありません。すなわち、自己の想念の変化を厳観視できないで神秘的な現象を追いかけるのはよくないというわけです。神秘といえば人間の心くらいに神秘的なものはない、ということに気づけばそれだけでも探求の材料は無限だと言えます。つまり人間研究が（というよりも〝自己探求〟）が円盤研究以前の問題だと言えるわけです。

● ア氏に関しては未だにとやかく言われていますが、フィクションだというキメ手はまだ出ていません。むしろ、本誌の質疑応答にもありますように悪質なデマがかなりまだ多く流されているようで、そのために周知性が容易に得られませんが、だからといってハニー氏やア氏は宣伝に躍起になっているわけでもありません。ただ誤りを訂正するだけだといった態度で泰然そのもののように見受けられます。「真理とは何か」とピラトからからかい半分に聞かれたイエスが無言でもって殺いたのも結局は「お前のような理解のない者に話したって仕様がないよ」という気持の上ではなくて、真理が活動であることを知っていたイエスが相手の行為そのものを真理だと観じたからではないかと思われます。こうした場合、イエスの側に何らの反応も起こるわけはなく、せいぜい無言か微笑くらいのことだったでしょう。「アダムスキとの訣別」と題する反論が出ているそうですが（本人が訣別したつもりでいてもそうはいきませんが）、これにたいして強いて私が申すとすれば、「私が所有している資料・情報類の三倍も三倍もの資料を入手してから反論を書きなさい。そしてそのためには先ず外国語を徹底的に勉強しなさい」とだけ申しておきましょう。

● これまで本誌を月刊として出していましたが、今後は隔月刊としますのであしからずご諒承下さい。私は日中の勤務時間を除いた夜間だけを利用して本誌を作製していますが、実のところガリ版で作るには大変な時間を要し、そのために一ヵ月のうち殆どこの仕事に費やされていたような次第でして、他に多くの研究や仕事を持っているのですけれども、それがやれない状態にあります。そこで隔月刊にしたわけですが、決して発行を中止することはしませんから安心下さい。次号は、6月中に出す予定です。

● ご質問、お気づきの点は何なりとお寄せ下さい。

日本G・A・P ニューズレター 第6・7号
編集発行人 久保田八郎
発行所 島根県益田市益田吉川イ25-2
日本G・A・P
昭和三十五年四月三日発行 頒価五〇円